

## ヨーロッパ放射線腫瘍学会(ESTRO36)報告

村木 宏一郎

ESTRO36は2017年5月5日～5月9日の会期でオーストリアのウィーンで開催されました。一昨年に田中先生、久原先生と共に CIRSE(リスボン)へ同行させて頂き大変刺激を受けました。自分もヨーロッパの学会で発表してみようと計画していましたが、如何せん ESTRO の日程がゴールデンウィークと丸被りしていることと 2017 年がウィーンで開催されることを知って、2016 年は遠慮して 2017 年にむけて前立腺癌のデータをまとめ出しました。無理を承知で同年に ESTRO, ASTRO の両方に抄録を出したいという希望を淡河教授へ相談したところ、承諾して頂きました。ウィーンへの憧れに思いを馳せて、スライド準備に飽きてきたらミュージカル「エリザベート」や「サウンド・オブ・ミュージック」を視聴し、「地球の歩き方」を眺めながら少しずつ学会準備をすすめていきました。

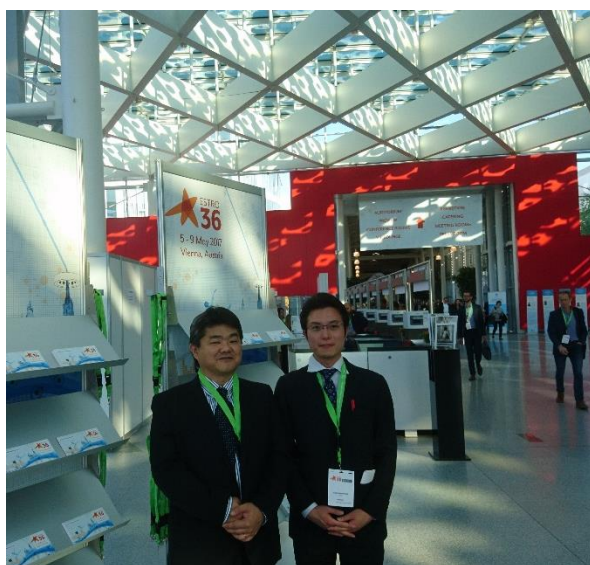
会場は Messe Vienna でオペラ座近くのカールスプラッツ駅から地下鉄移動でした。電子ポスターだけでも良いのでは？と思っていたのですが、Poster viewing session 用に念のためポスターを印刷していきました。結局当日は印刷ポスターの掲示も必要であったので持参して幸いでした。たどたどしい英語でのやりとりにはなりましたが、毎週火曜日の英会話レッスンが少しは役立ったのではないかと思います。Chiago 先生ありがとうございます。今回のテーマは"The analysis of radioactive implant migration in patients treated iodine-125 seeds for permanent prostate brachytherapy(PPB) with median lobe hyperplasia(MLH)."で中葉肥大を有する前立腺癌に対する密封小線源治療成績を発表しました。現在、久留米大学病院は前立腺癌密封小線源治療の年間症例数が西日本で 2 番目に多い施設です。以前より泌尿器科医や放射線治療医が疑問に思っていた相対的禁忌症例についてまとめたところ、海外の先生方からも大変関心を頂きました。

末藤先生は佐賀 HIMAT から"A multicenter retrospective study of carbon-ion radiotherapy for locally advanced olfactory neuroblastomas;Japan Carbon Ion Radiotherapy Study Group (J-CROS) Study (1402HN)"というテーマで嗅神経芽細胞腫に対する重粒子線治療の多施設研究の発表をされていました。また各ブースでの発表も興味深いものがあり、定位放射線治療や粒子線治療等の高精度治療の発表が目立ちました。機器展示ではバリアン社から IMRT 専用機の発表がありました。明らかにトモセラピーを意識した治療装置であり、昨今の IMRT 需要の重要性を感じました。

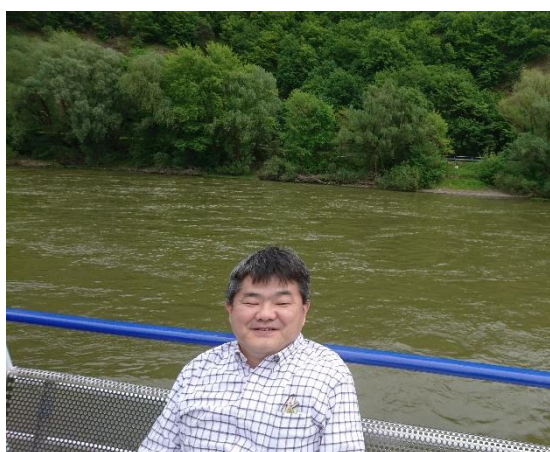
さて、学会の外ではオペラ座にて「ジークフリード」を鑑賞し、日曜日は教会のミサでウィーン少年合唱団の透き通った歌声を聴き、ドナウ川クルーズも楽しませて頂きました。ホテル ザッハーのカフェで「ザッハトルテ」を食べ、何軒かトルテの食べ比べもしてみました。最終日は隣国スロヴァキアへ行きたいという末藤先生のリクエストがありました。帰国当日だったので帰りの飛行機の時間に不安を感じましたが、末藤先生の「なんとかな

るさあ〜」という言葉に後押しされて、誘われるがままブラチスラヴァ観光を強行しました。小さな町でしたが、綺麗な街並みで来て良かったと感動しました。帰りはフランクフルト経由でしたが、乗り継ぎが1時間しかないことにビビりつつ、CIRSEの時のシャルルドゴール空港のような慌ただしさを想定していましたが、意外とすんなりドイツの出国カウンターを通過でき、無事帰国できました。

ESTRO37はバルセロナのようですが、2018年は放射線腫瘍センターの開設もあり慌ただしい一年になることが予想されます。そのような中、今期中にESTROへ参加させて頂き、安陪教授、淡河教授をはじめ医局の先生方に大変感謝しております。



会場にて



ドナウ川クルーズでほろ酔いの末藤先生



Hotel Sacher のザッハトルテ